慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	小林秀雄「私小説論」再読(続) : 小林秀雄と中村光夫
Sub Title	Hideo Kobayashi and Marxism in prewar Japan (II)
Author	寺出, 道雄(Terade, Michio)
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	2006
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.99, No.3 (2006. 10) ,p.585(233)- 598(246)
JaLC DOI	10.14991/001.20061001-0233
Abstract	
Notes	研究ノート
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-20061001-0233

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「三田学会雑誌」99 巻 3 号（2006 年 10 月）

研究ノート

小林秀雄「私小説論」再読（続）

——小林秀雄と中村光夫——

寺　出　道　雄

1　はじめに

本稿では，前稿「小林秀雄『私小説論』再読」[1]に続いて，小林秀雄の批評「私小説論」（1935 年）におけるマルクス主義文学論[2]について考えていく。

その場合，本稿では，前稿で問題の所在を指摘しながら十分な検討をおこなわなかった，小林のマルクス主義文学論と中村光夫のマルクス主義文学論との関連について検討する。すなわち，従来，小林の「私小説論」におけるマルクス主義文学論に，中村のマルクス主義文学論がどのような影響を与えたのかについては，その影響を重視する見解とそれを否定する見解とが存在した[3]。しかし，その問題をめぐる論議では，小林の議論と中村の議論の詳しい比較はおこなわれなかった。そこで，その点についてやや詳しく見ていくなかで，「私小説論」の意義について改めて考えてみようというのが，本稿の課題である。

以上のような性格から，本稿では，前稿で述べたことがらについては叙述を簡単なものとして，その詳細については読者に前稿の参照をもとめることにする。

(1)　『三田学会雑誌』99 巻 2 号，2006 年 7 月。

(2)　関連の文献において，小林は，「マルクス主義文学（運動）」と「プロレタリヤ文学（運動）」という二つの用語を同義に用い，中村は，「プロレタリア文学（運動）」という用語を用いている。その双方が問題としているのは，もっぱら「日本プロレタリア作家同盟」（略称ナルプ。以下，その略称を用いる。）系の文学（運動）であったことを考慮して，本稿の地の文章では，「マルクス主義文学（運動）」という用語を用いることにする。

(3)　中村の影響を重視する見解は，平野謙によって主張され，それを否定する見解は，江藤淳によって主張された。前掲拙稿「小林秀雄『私小説論』再読」を参照。

2 「私小説論」の形成

1　ここでは，まず，後の議論のための準備として，小林の「私小説論」におけるマルクス主義文学論の内容を簡単に要約しておこう。[4] なお，その要約は，小林自身の叙述からは，順序を適宜変更しておこなわれている。

i)「封建主義的文学」である日本の自然主義文学

私小説の形式をとった日本の自然主義文学は，ブルジョア文学ではなく封建主義的文学であった。日本の自然主義作家たちには，個人と社会との対立は意識されず，彼らにとっては，「私」の世界がそのまま社会の姿だったからである。

ii) 西欧の「私小説」との差異

もちろん，西欧にも私小説は存在した。しかし，西欧の作家たちが「私」を語ったとき，その「私」は，十分に社会化した「私」であった。すなわち，彼らは，個人と自然や社会との確然たる対決を意識していたのである。

iii)「技法」としての自然主義の導入

これに対して，日本の作家たちは，自然主義という外来思想を，ただ技法としてのみ受け入れた。その技法としての西欧思想の導入のもとで，私小説の形式をとった日本の小説は，驚くべき技法の発達をみせた。

iv) 背景にあるブルジョア社会の狭隘性

そうした自然主義の導入の特質が生じたのは，自然主義文学の背景である実証主義思想を育てるためには，日本の近代市民社会は狭隘であったのみならず，要らない古い肥料が多すぎたからである。独自の長く強い文学の伝統のもとで，完成された審美眼をもった日本の作家たちは，新しい思想を技法のうちに解消することになった。

v)「思想」としてのマルクス主義の導入

そのような状況のもとで，技法に解消しての導入を許さない，絶対的な普遍的な思想としてのマルクス主義にもとづくマルクス主義文学が導入された。マルクス主義の教義は，強固な公式主義にまで昂られていったが，その公式主義化した思想によって，作家たちの日常生活に対する反抗は初めて決定的なものとなった。

vi) マルクス主義文学の役割と制約

マルクス主義文学の技法は貧しく，その作品を高く評価することはできない。しかし，その技法の貧しさのうちに，日本の私小説の伝統は決定的に死んだのである。

マルクス主義文学運動の崩壊のなかで生れた転向作家たちの文学的な課題は，そうした従来の私小説の否定のうえに，かつて公式主義化した思想によって自らが征服しようとした自我を再発見していくことである。

2　さて，以上のような内容の小林のマルクス主義文学論が，中村のマルクス主義文学論とのいかなる関係において形成されたのかが，従来，問題とされ，本稿でも問題としようとする点である。

---

(4)　小林の議論について，詳しくは前掲拙稿「小林秀雄『私小説論』再読」を参照。

その場合，小林と中村がマルクス主義文学にふれた主要な文献が，どのような時系列的順序で発表されたかを知っておくことが便利であろう。そこで，それを一覧できるように表示——発表の「月」は掲載雑誌の号によってしめす——すれば，以下のようである。(5)

1933年10月	小林「私小説について」
1934年1月	小林「文学界の混乱」
1935年2月	中村「転向作家論」
同 年4月	中村「プロレタリア文学運動」
同 年5～8月	小林「私小説論」
同 年6月	中村「生活と制作と」
同 年9月	中村「私小説について」
1937年8月	小林「文芸批評の行方」

この表示からすれば，小林の「私小説論」におけるマルクス主義文学論の原型をなしたものは，彼自身の「私小説について」と「文学界の混乱」における議論であったことになる。

「私小説について」では，マルクス主義文学について，次のように述べられていた。

「プロレタリヤ文学運動が，わが国の私小説の伝統を勇敢にたたき切つたといふ事は，実際の作品のいい悪いは別としても，大きな功績であつた。(6)」

また，「文学界の混乱」では，次のように述べられていた。

「僕はマルクス主義文学を信じてはをらぬ。併しマルクス主義が捲き起した社会小説制作の野心を信ずる。己れを捨てて他人の為に書くといふ情熱を信じてゐる。(7)」

「私小説は今二つの方向〔マルクス主義文学と心理主義文学・理知主義文学——引用者〕から破れようとしてゐるのだ。ただ前者は思想に憑かれて己れは苦もなく捨てたが，その仕事に新しい己れの顔を発見するに至らない。後者は己れの個人的な像を周囲から強ひられて破つたが，新しい文学を築かうとする内的必然を発見するに至らない。(8)」

ここで，「私小説について」および「文学界の混乱」における叙述が，先の整理におけるvi）の叙述に繋がっていったことは，容易に見てとれるであろう。

その場合，vi）の叙述は，大摑みにいえば，「私小説論」におけるマルクス主義文学理解の結論にあたるということができる。したがって，「私小説論」以前においては，小林自身には，「私小説論」におけるマルクス主義文学理解の結論はあったが，その結論を導く具体的な議論は組み立てられていなかった——少なくとも，明示的には表出されていなかった——ことになる。「私小説について」および「文学界の混乱」と「私小説論」との間には，ミッシング・リンクが存在する。

---

(5)　前掲拙稿「小林秀雄『私小説論』再読」においては，中村の「生活と制作と」を関連文献として挙げることを失念していた。本稿で，それを追加しておく。

(6)　小林秀雄「私小説について」『新訂 小林秀雄全集』第三巻，新潮社，1933/78年，p.47。

(7)　小林秀雄「文学界の混乱」『新訂 小林秀雄全集』第三巻，新潮社，1934/78年，p.60。

(8)　同上，p.61。

3　それでは,「私小説について」および「文学界の混乱」の発表と,「私小説論」の発表との間に発表された，中村の「転向作家論」および「プロレタリア文学運動」は，そのミッシング・リンクを埋めるものたりうるであろうか。

その点を確認するために，ここでは，それらの二つの批評における中村の議論から，そこに含まれた個々の命題を，叙述の本来の流れから切り離して要素的な命題として取りだし，それらを，小林の「私小説論」における議論を整理したときに用いたのと同一の叙述の流れ——先のi）からvi）への流れ——にそって並べ替えてみよう。そうすることによって，彼ら双方の議論に含まれた共通性を端的に探ることができるだろうからである。

そうした関心から，中村の「転向作家論」および「プロレタリア文学運動」における叙述を整理すると，以下のようになる。

i）1920年代の末から30年代の初頭にかけて，マルクス主義文学は，日本の文学界を席捲した。

「人々は云つた。ブルヂョア文学は敗退した。プロレタリア文学は勝利を得たと。冗談ぢゃない。ブルヂョア文学などといふものはなかつたのだ。欧州文学の性格は，まだ理解さへされてゐなかつたのだ。[9]」「有るものはただ封建的な私小説だけであつた。[10]」

「日本の明治文学とは外国文学を装飾として接ぎ木されたとは云へ，本質的には江戸文学の土台の上に開花したものにすぎなかつた……。[11]」

「なるほど我国の一時代前の作家は皆自己の苦痛を披瀝して来た。彼等は自分の苦しみしか語らなかつたと云つてもよい位である。

だがそれは彼等が自己以外に語るべきものを持たなかつたからにすぎぬ。彼等にとつて，社会とは自分の友人と家族と親戚とにすぎなかつた。社会思想は少しも彼等の文学に影響を及ぼさなかつた。……欧州文学の苦しげな相貌は彼等には無縁であつた。彼等の自意識は漸く封建的道徳に対する個人主義の形をとつて，現はれかけたにすぎなかつた。[12]」

そこでは,「当然，私小説といふ之等の苦痛を盛るに最も便利な形式が独自の発達を遂げた。[13]」

「私小説といふ言葉そのものは訳語であらうが，我国のそれには外国の一人称小説にない独特な性格がある。それは社会観念の極端な欠如である。といふのは何もそれらの小説の主人公が『社会思想』を持たぬといふことではない。作家が彼と社会（読者を含む）の対立を少しも意識してゐないことを指すので

---

(9)　中村光夫「転向作家論」『中村光夫全集』第七巻，筑摩書房，1935/72年，pp.36–37。
(10)　中村光夫「プロレタリア文学運動——その文学史的意義」『中村光夫全集』第七巻，筑摩書房，1935/72年，p.71。
(11)　前掲中村「転向作家論」，p.36。
(12)　同上，p.35。
(13)　同上，p.35。

ある。[14]」

「外国の近代文学を苦しめた意味での個人と社会との相剋は我国の明治文学には無縁であつた。[15]」

ii）これに対して，西欧の近代文学は異なった性格をもっていた。

「欧州近代文学の歴史とは，各時代の支配思想に抗して，その時代に生きる苦痛を自己の肉体を通じて表現した人々の戦跡にすぎぬではないか。したがつて，彼らの文学は一刻も社会を，社会思想を，目から離したことがない文学である。[16]」

すなわち，「個人の上に絶えず社会の影を感じ，又此両者の間隙を戦ひの場とするのが欧州近代文学の伝統[17]」だったのである。

iii）しかし，日本の作家たちは，「ニイチェを耽読し，トルストイを輸入し，さてはモウパッサンを模倣した所で，彼等の社会観は為永春水のそれと本質的には変りなかつたのである。[18]」「ツルゲエネフから，ジェームズ・ジョイスに至るまで，我国の文学は外国文学の技法を輸入するに止まつた。文学の輸入の中で，外面的な技巧の模倣が一番容易であるからだ。[19]」

iv）「これらの技法〔文学技法——引用者〕を支へる外国作家の精神の悪闘は，これまでの我国の文壇から完全に無視されて来た。これは無理もないことである。我国の事情は作家にかうした闘ひを強ひる何物も持たなかつた。……自己の感性の世界に安住することこそ彼等の希ひである。[20]」。

「個人思想の輸入がいささかも社会的文学を生まず，江戸文学の伝統に吸収せられ，私小説といふ独自の形式を生み，作家が社会を意識するためには，集団主義の中でも最も強烈なマルキシズムの政治的結論に引き摺られねばならなかつたのは，東洋的退嬰的な文人気質が如何に日本では根強いかを示すものである。[21]」

v）「この伝統〔明治文学以来の伝統——引用者〕がそのまま大正に持ち越され，文士は益々気むづかしくなり，それを甘やかして扱ふ手付きはいよいよ精妙になり，自己陶酔，自己嫌悪の風潮が頂点に達したとき，突然プロレタリア文学が輸入された。それ以来の文壇の混乱，矛盾は我々の記憶になほ新たな所である。[22]」

「今迄ただ素朴に自己の苦痛を信じて，それを披瀝してきた作家達は，さういふ苦痛は小市民根性の下らぬ表はれであると云はれて，怖へ上がつた。凡そ思想といふものに面接し

（14） 前掲中村「プロレタリア文学運動——その文学史的意義」，p.71。
（15） 同上，p.71。
（16） 前掲中村「転向作家論」，p.35。
（17） 前掲中村「プロレタリア文学運動——その文学史的意義」，p.72。
（18） 前掲中村「転向作家論」，p.36。
（19） 同上，p.37。
（20） 同上，pp.37–38。
（21） 同上，p.46。
（22） 同上，p.36。

たことのなかつた作家達が，実証主義的思想の中でも最も完備したマルキシズムに向つて，太刀打ち出来なかつたのは当然である。[23]」

「彼等〔マルクス主義に直面した既成作家たち——引用者〕はただ，自己の真摯な苦痛を事もなげに蹂躙する横暴な理論を恨めしげに眺めただけであつた。……

すでに自己の表現を完成して血肉と化した作家達は黙々として外方を向いた。気の弱い者は泣言を書いて，自分の『人間修行』の役に立たなかつたことを嘆いた。気早な人々は『転換』を声明した。[24]」

vi）こうして，マルクス主義文学は，日本の「作家に社会といふ観念を与へた[25]」のである。

「日本文学は真の近代文学としての烙印を初めてプロレタリア文学によつて押されたのである。矛盾，動揺する社会といふ概念が，初めて決定的に作家の脳裡に座を占めたのである。かつて穏やかに調和してゐた自己の感性と思想との分裂に作家の顔が悲痛に歪んだのもこの時からである。[26]」

「作家は今後いかなる流派にぞくするとを問はず，一社会人としての自覚を強要されるであらう。社会に服従しようが反抗しようが，彼は最早眼中から社会を逸することは不可能である。[27]」

しかし，そうしたマルクス主義文学は，自らが課した大きな制約をこうむっていた。

「日本のプロレタリア文学は理論を支柱としなければ一人歩きは出来なかつたのである。だが事実上，これ程理論が作品の実体と離れたことはないのだ。理論はただ作家の上に盲目的な暴力をふるつたにすぎぬ。……プロレタリア文学に前時代のレアリズムを抜いたレアリズムの作品が一つでもあるか。不幸にして私はその実例を知らないのである。[28]」

そうしたマルクス主義文学の役割りと制約とは，転向作家たちにとっての課題をも指示している。

「『文学』にかへつた諸君のまづ為すべきことは，理論家的傲岸を捨てた生の眼で諸君の周囲と自己を顧みるにある。……そのとき現実は，これまで全く思ひがけない豊富複雑な相貌を諸君に明かすであらう。[29]」

「諸君はすでに充分に自己を否定した。だがこの一個の鏡と化した己の心を冷酷に磨いて，自己の，他人の，姿を映じだすことが，自己の苦痛より，社会の苦痛を信ずることが，自己の社会理論の極限に，社会の実生活を信ずることが，どれ程豊富な，且つ感動的な仕事であるか，それは諸君が今後身を以て明かすべき問題である。[30]」

（23） 同上，p.36。
（24） 同上，p.36。
（25） 同上，p.49。
（26） 前掲中村「プロレタリア文学運動——その文学史的意義」，pp.73–74。
（27） 同上，p.73。
（28） 前掲中村「転向作家論」，p.47。
（29） 同上，p.49。
（30） 同上，p.50。

4　中村の，「転向作家論」および「プロレタリア文学運動」における議論は，以上のようなものであった。

以上のi）～vi）の各項それぞれにおいて，中村の議論が「私小説論」における小林の議論と明確に照応していることからすれば，中村の議論が，小林の「私小説について」および「文学界の混乱」と「私小説論」との間を繋ぐミッシング・リンクを埋めるものであったと考えることは，極めて自然であろう。(31) 中村の議論の骨子がほぼでそろった「転向作家論」は，雑誌『文学界』に掲載されたのであるが，それを『文学界』を主導していた小林が読まなかったことはありえない。

一方，中村は，「転向作家論」において，「私小説の伝統を最も勇敢に叩き破つたのは，いや少なくとも破らうと試みたのは諸君等プロレタリア作家ではないか」(32)と述べていた。この表現が，先に見た「私小説について」における小林の表現と瓜二つのものであることは，すぐに見てとれる。また，中村が，旧制一高の生徒であったとき以来，小林に親炙していたことは，前稿でふれたところである。

以上のことからすれば，小林の「私小説論」の形成について，次のように解釈することができるであろう。

――中村が，自らのマルクス主義文学論を作りあげるうえで，種子としての役割りを果たしたものは，小林の「私小説について」および「文学界の混乱」におけるマルクス主義文学理解であった。しかし，そこにはマルクス主義文学理解の結論はあったが，その結論を整合的に導く具体的な議論は存在しなかった。中村は，小林のマルクス主義文学理解から結論を受け継ぎ，その結論を整合的に導く具体的な議論を組み立てた。小林は，その中村によって具体的に組み立てられた議論を，「私小説論」において受容した。

3　中村光夫と小林秀雄

1　以上で見た中村の叙述が，いかにも若書きであることを感じさせるのに対して，小林の「私小説論」の叙述には老練な手際――といっても，小林が「私小説論」を書いたのは，まだ三〇代の前半だったのだが――が感じられる。とりわけ「社会化した『私』」という，人口に膾炙したキーワードを作りだしていったあたりに，その手際を見ることができる。

しかし，「社会化した『私』」というキーワードの創出のみでなく，小林のマルクス主義文学論は，中村のそれに対しての独自性をもっていた。それは，おもに，以下の二点を明示的に述べたこととして整理できる。(33)

日本における自然主義文学の導入の特質が生じたのは，自然主義文学の背景にある実証

(31)　この点では，前掲拙稿「小林秀雄『私小説論』再読」における，小林の議論の整理の参照をもとめたい。
(32)　前掲中村「転向作家論」，p.31。
(33)　それらの論点については，前掲拙稿「小林秀雄『私小説論』再読」を参照。

主義思想を育てるためには，日本の近代市民社会は狭隘であったからであるとする論点，すなわち，日本における自然主義の導入の特質を，日本の社会構造の特質に還元して捉える議論——先の整理の iv）にふくまれる——は，小林にほぼ独自であったといえる。

また，マルクス主義の「絶対的な普遍的な」思想としての性格が「公式主義」をもたらしていったという論点，すなわち，マルクス主義においては，理論そのものが一つの客観的な実在と化して，それを抱懐した個人を，逆に，包摂・拘束していくという事態が生れることになったと指摘した議論——先の整理の v）にふくまれる——も，小林にほぼ独自であったといえる。

この二つの論点は，1930 年代における自然主義文学理解およびマルクス主義理解として，出色のものであった。[34]

一方，中村のマルクス主義文学論の特質は，マルクス主義文学史論としての色彩が濃く，その史論としての議論が巧みであったことである。そこには，後に多くの優れた文学史論を書くことになる中村の資質の片鱗が現われていた。

中村は，「逆説を恐れず云へば，日本のプロレタリア文学は，文学のブルヂョア化（近代化）運動の表はれであつた」[35]と述べる。

「我国の社会に始めて，複雑的な，しかも盲目的に運動する近代社会の相貌を与へたのは，云ふまでもなく欧州大戦である。作家は，いや当時の知識人一般は始めて，社会が一概念として，彼の個人生活と対立することを知つたのだ。この社会意識と私小説の伝統との問題を満たすための文学の自己修正——これがロシア革命の影響を受けて勃興したプロレタリア文学運動が，我国の文学から課せられた課題であつた。」[36]

「プロレタリア解放のためと称する文学が『ブルヂョア・ジャーナリズム』を風靡したのはそれ自身が一のブルヂョア文学的な役割を果したからである。インテリを糞味噌にけなした小説を知識階級が有難がつてよんだのは，その小説が私小説と彼等の社会意識との間に横たはる絶望的な間隙をみたしてくれたからこそである。」[37]

——モダン modern という一つの言葉は，近世，近代，現代という三つの日本語に訳し分けられる。日本の近代は，なお色濃く近世を引きずりながら，第一次世界大戦後に，欧米諸国と同調して現代に突入した。そうした

---

(34) 逆に，中村の議論にはあって，小林の議論にはない論点としては，日本のマルクス主義文学運動の文学史的な位置は，西欧におけるロマン主義運動に対比されるものであった，という論点と，日本における私小説の根強い伝統のもとでは，マルクス主義文学の技法自身が私小説化していくことになった，という論点がある。

とりわけ後者は興味深い論点であるが，それらは，以下の行論に大きくはかかわらないので，ここでは，その存在を指摘しておくのみにとどめる。

(35) 前掲中村「プロレタリア文学運動——その文学史的意義」，p.71。

(36) 同上，p.72。

(37) 同上，pp.72–73。

近世と近代と現代との混在は，当然，日本の知識層の精神のうちに写像を結んだ。

近世を引きずったままの近代は，自然主義に発する私小説の伝統として表現されていた。そうした近世を引きずったままの近代の精神は，現代の精神に向うためには，ちょうど，関東大震災が東京の景観から江戸の名残りを破壊し去ったように，破壊されなければならなかった。そして，日本の知識層の精神における大震災は，マルクス主義としてやってきた。マルクス主義文学は，自然主義に発する私小説の伝統を破壊した。

しかし，マルクス主義文学の体験が，破壊以上のことを成しとげるためには，さらにマルクス主義からの転向ないし離脱の体験が必要とされた。

2　一九世紀の最後の年である 1900（明治 33）年と，その前後の数年の間に生れた知識人たちを「マルクス主義・モダニズム世代」の知識人と呼ぼう。彼らに物心がついたとき，日露戦争は終わっており，日本はひとまずの「一等国」になっていた。彼らが，一〇代の末から二〇代の初頭に，本格的に思想形成をおこなおうとしたとき，第一次世界大戦は終わっており，世界は狭義の二〇世紀に突入していた。そして，日本は，戦後の国際体制のもとで，その「一等国」としての地位をより確かなものとしていた。

そうした世界と日本の状況のもとで，日本の「文明開化」の成果をもっとも円満に享受しえた世代であった彼らは，マルクス主義あるいはモダニズムによって，日本の「文明開化の最後の段階」[38]を担っていった。「一等国」の国民として，欧米の新思潮を同時代的に直輸入することが可能とされたもとで，彼らの思想は，「日本性」ないし「国粋性」と対比されるものとしての，「欧米性」ないし「国際性」を強く帯びていった。

そうした時代のなかで，フランス文学によって自己の思想形成をおこなったものの，また，マルクスの熱心な読者ではあったものの，マルクス主義とモダニズムの双方に対する強固な批判者となっていった小林（1902 年生れ）は，「マルクス主義・モダニズム世代」の異端であった。

一方，明治の最後の年であり，大正の最初の年である 1912（明治 45・大正元）年と，その前後の数年の間に生れた知識人たちを――「マルクス主義・モダニズム世代」に対する――「遅れてきた青年の世代」の知識人と呼ぼう。そうした彼らが，一〇代の末から二〇代の初頭に本格的に思想形成をおこなおうとしたとき，マルクス主義とモダニズムの双方はその影響力の頂点を迎えていた。彼らの世代のうちの知的に早熟な人々は，マルクス主義やモダニズムの影響を強く受けた。

中村（1911 年生れ）は，そうした世代の一

(38) 保田与重郎「文明開化の論理の終焉について」『保田与重郎全集』第七巻，講談社，1939/86 年，p.13。

員であった。[39]

中村は，フランス文学を学ぶ一方，マルクス主義者となった。若きマルクス主義者である彼は，すべての人々が「科学者か芸術家か何れかになる」ような「完全な共産主義社会」[40]を夢見ながら，「小市民の自己満足を脱し」て「レーニンの線に沿つて，正しく労働者の文学的要求に答へる」[41]ための小説や批評を書いた。確かに，若い中村の夢も創作も心底のものであったろう。しかし，彼は，あくまでも「マルクス主義・モダニズム世代」の人々によってマルクス主義の影響を与えられた世代の人であり，マルクス主義の影響を与えた世代の人ではなかった。

そうした中村のマルクス主義受容の世代的な特質は，そのマルクス主義者としての思考——それは，ありきたりのものであった——によってではなく，マルクス主義からの離脱の後の思考によってしめされることになった。

3　1933（昭和 8）年ないし 34（昭和 9）年に，マルクス主義から離脱した中村は，これまで見てきたように，1935（昭和 10）年になって，二つのマルクス主義文学論を発表した。

その中村のマルクス主義文学論のもっとも顕著な性格は，そこに日本におけるマルクス主義の歴史的な役割りに関する，アイロニカルな視線が存在することであった。

日本の自然主義文学を，「ブルヂョア文学」ないし「小ブルヂョア文学」としてではなく，「封建的な私小説」として断じ，「プロレタリア文学」を，いわば偽装 disguise した「ブルヂョア文学」として断ずるその所説は，マルクス主義文学に固執する立場からすれば，「間違いとしての『冗談』」[42]に他ならなかった。

中野重治（1902 年生れ）は，中村・小林の自然主義文学理解に対して，こう述べた。

「日本の自然主義文学は，……封建主義にたいするブルジョアジーの戦い，そのある程度までの勝利の反映にほかならなかつた。勝利がどれほどしみつたれたものだつたにしろ，日本は世界史的な規模で資本主義の国となつた。日本の自然主義文学は，この資本主義のもとでの，この資本主義のためのいとなみとしてのブルジョア文学だつたのである。……

しかしそれならば，中村氏や小林氏の判断は取るにも足らぬものだろうか。私はそうは思わない。日本の自然主義文学が封建主義文学だつたとか，日本にはブルジョア文学などというものはなかつたのだということは間違いだが，この間違いとしての『冗談』は，日本のブルジョア文学がそれほど封建的なものを引きずつてきたことの，日本ブルジョアジーの封建主義にたいする戦いがそれほど中途半端で，その勝利が不徹底で，敵である封建主義とのずるずるべつたりの妥協にすべりこん

---

(39)　丸山真男（1914 年生れ）を，その世代の他の一員とみなすことができる。

(40)　中村光夫「プロレタリア文学当面の諸問題——創作方法について」『中村光夫全集』第七巻，筑摩書房，1932/72 年，p.8。

(41)　同上，p.14。

(42)　中野重治「二つの文学の新しい関係」『中野重治全集』第一〇巻，筑摩書房，1936/79 年，p.424。

だことの，そしてこの妥協のためにうつちやらかしにされたブルジョア的なものをプロレタリアートが拾いあげねばならなかつたことの左まえの反映にほかならぬと思う。[43]」

いかにも中野らしい，律義な応答である。

中村・小林の自然主義文学理解が，日本資本主義論争における講座派の理論を踏まえたものであったことは，前稿でふれた。中野の応答もそうであったことは間違いない。その場合，もし，講座派の理論の文学史の理解への正確な適用が問題であるとすれば，中野の答案の方に，中村・小林の答案よりも高い得点を与えるべきであろう。

しかし，中村によって作られた答案は，「間違いとしての『冗談』」であったというよりは，彼自身のいう「逆説」，あるいは，むしろアイロニーであったと見做したほうがよい。講座派の理論を，冷めたアイロニーとしての自然主義文学論・マルクス主義文学論に転じていったことが，中村の議論の基本的な性格だったのである。

そして，中野の生真面目な答案に対比される，中村の冷めた答案には，単に中野と中村の両者の個性の差異には還元できない，「マルクス主義・モダニズム世代」の思考と「遅れてきた青年の世代」の思考との差異が表現されていた。

中村は，「我国では恐らく未曾有の熱情をもつて戦はれた文学運動の残した文学的遺産はほとんど皆無である[44]」，マルクス主義文学運動の潰滅の後に「残されたものは伝統の崩壊にもとづく複雑な混乱にすぎない[45]」と述べる。そして，中村は，こう続ける。

「だがそれでよいのだ。彼等〔マルクス主義文学者たち――引用者〕は社会の混乱を正確に文学の混乱に反映させ様と願つたにすぎないのだ。今日の文学の混乱は社会の混乱の現はれである限り正しいのだ。

そしてかうした消極的な混乱を脱れ，もはや私小説の手法では決して捕へられぬ今日の社会に生きる人々に新しい人間的面貌を与へることは，すでに別の人達の仕事であるからだ。[46]」

ここで，「別の人達」のうちに中村自身がふくまれることは，いうまでもない。それは，「遅れてきた青年の世代」の知識人である中村の，「マルクス主義・モダニズム世代」の知識人からの思想的な自立の宣言であった。「マルクス主義・モダニズム世代」の異端である小林の影響のもとで，「遅れてきた青年の世代」の知識人の代表の一人となっていく中村の思想の，「マルクス主義・モダニズム世代」の知識人の思想からの自立がおこなわれたのである。

そうした自立が，自立の対象であるマルクス主義文学，さらに，そのマルクス主義文学が「叩き破つた」自然主義文学に対するアイ

---

(43) 同上，p.424。
(44) 前掲中村「プロレタリア文学運動――その文学史的意義」，p.74。
(45) 同上，p.74。
(46) 同上，p.74。

ロニカルな視線をともなうことは，極めて自然であった。マルクス主義文学運動の中心であったナルプの構成員であった人々と，ナルプの構成員ではなくマルクス主義文学運動の周縁にいた中村との差異は，同時に「マルクス主義・モダニズム世代」と「遅れてきた青年の世代」の差異でもあった。[47]

4　大雑把にいえば，1930 年代の前半，あるいはやや遅くまでをとれば 1936（昭和 11）年における「思想犯保護観察法」の施行の頃までは，コミュニズム運動の実践あるいはコミュニズム運動と直結した社会団体・文化団体の実践に加わった人々が，国家によって，「転向させる必要がある」人々と認定された。そして，それらの人々は，自己の所属組織を供述し，その活動に再参加しないことを誓約すれば，「転向した」ものと認定された。そうした転向の定義は，「転向する側」（あるいは「転向しない側」）にも共有されていた。逆に言えば，1930 年代の前半には，1920 年代の末や 30 年代の初頭からその範囲は徐々に狭まっていったとはいえ，たとえコミュニズムに共鳴的な芸術や学術であっても，それが実践から切り離された芸術や学術として，かつ帝国大学を始めとした官許のアカデミズムの外で，表明される限りは，合法性を維持していたといえる。[48]

このようなかなりゆるい転向の定義は，転向の様相を多様なものとした。

単に，認識のあり方を規定するのみでなく，実践にいざない，個人を全人格的に**摑**みとる思想であったマルクス主義を抱懐した人々にとって，国家の権力的な抑圧のもとで実践から離脱させられていくことは，自らの人格の全一性を，結果として自らが破壊することになる深刻な経験であった。少なくない人々にとって，転向は，強い「良心のいたみ」[49]をともなったのである。そして，1930 年代の中葉までの彼らには，まだ，その良心のいたみを表出する自由が残されていた。

そうした状況のもとで生れたのが一群の転向文学であった。中村が揶揄的に表現したように，「多くの作家が投獄され，しかも「その大部分がほとんど時を同じくして，出獄し，数箇月を出ずして，自己の刑務所内の経験を私小説の形式で大雑誌に発表する」という，「ほとんど世界を通じて類例」のない「奇妙な現象」[50]が生じた。

そうしたなかで，良心のいたみをともないながらマルクス主義文学運動という小社会から切り離され，むきだしの個人とされた作家た

（47）　中村と同じく，マルクス主義の強い影響下に，非マルクス主義的な思想形成をおこなっていった丸山真男は，しばしば自己を大正生れの世代として規定していた。

（48）　これに対して，1936（昭和 11）年頃からは，たとえ実践から分離された芸術や学術として表明されても，それがコミュニズムに共鳴的な芸術や学術である限りは，合法性を剥奪されていき，その合法性の剥奪は，翌 37（昭和 12）年頃には，非コミュニズム系のマルクス主義の芸術や学術の表明におよんでいった。

（49）　丸山真男『日本の思想』岩波新書，1961 年，p.57。

（50）　前掲中村「転向作家論」，pp.30–31。

ちが描いた軌跡は多様であった。そして，その多様性は，転向文学という事象に，独特の思想史ないし精神史的意味を与えていった。

ある人々――中野重治に代表される――は，実践からは離脱しながらも，なお自らを「革命運動の伝統の革命的批判」[51]に繋がらせようとした。ある人々――武田麟太郎（1904年生れ）ら「人民文庫派」の人々――は，市井の人々を発見した。また，ある人々――亀井勝一郎（1907年生れ）ら「日本浪漫派」の人々――は，日本の文学伝統を発見した。

このような多様な軌跡には，しかし，共通する要素があったということができる。それは，かつてナルプに加盟し，その強固な集団性・共同性に包摂された，彼ら「マルクス主義・モダニズム世代」の人々，あるいはそれよりやや若い人々は，転向によって，ひとたびはむきだしの個人とされた後に，再び，自らを何らかの共同性――革命運動の伝統，市井の人々，日本の文学伝統――に繋がらせようとしたことである。彼らは，かつてナルプに，したがって革命に託した，人々の共同性の確立への希求を，共同性の確立を託しうる新たな存在の探求によって置きかえようとしたのである。

もちろん，そうして人々の共同性の確立を求めてやまなかった彼らに，個人の自覚が欠如していたわけではない。むしろ，彼らには，近代化・現代化の進行のなかで孤立していく個人の自覚が強烈であったからこそ，人々の共同性の確立と再確立とを強く希求したのであろう。しかし，そうして前世代の人々が，マルクス主義文学運動の挫折のうえに，再び直接の共同性を希求していったのに対して，中村は，「遅れてきた青年の世代」の一員として，あくまでも個人の自覚の領域に踏みとどまろうとした。彼は，小林の思考の影響のもとに，マルクス主義文学運動において，作家たちの社会（大社会）に対する能動性が，マルクス主義文学運動（小社会）そのものに対する受動性――運動集団による個人の包摂・拘束――によって確保されていたことを，見抜いていった。[52]

「プロレタリア文学」を，偽装した「ブルヂョア文学」として捉える，中村の冷めたアイロニーには，自らのマルクス主義体験を，個人の自覚に，すなわち，「人間は互に理解し合ふことは決して出来ない」という「暗黒な孤独感」の自覚に転換しながら，その自覚を，なお「現代の混乱した社会」[53]を描きだす文学の可能性の探求に結びつけていった，中村自身の軌跡が投影されていた。

4　おわりに

マルクス主義文学からの，転向ないし離脱の体験によって描かれた多様な軌跡のなかには，個人はむきだしの個人として社会と対立

(51)　中野重治「『文学者に就いて』について」『中野重治全集』第一〇巻，筑摩書房，1934/74年，p.56。
(52)　その認識は，先に見たように，小林の「私小説論」において明示的に表出された。
(53)　中村光夫「私小説について」『中村光夫全集』第七巻，筑摩書房，1935/72年，p.140。

していくしかないという自覚に，自らの社会に対する姿勢の立脚点をもとめようとした，中村光夫の軌跡が含まれていた。

その場合，中村が，そうした軌跡を投影したマルクス主義文学論を作りあげていくうえで，種子としての役割りを果たしたものは，小林秀雄の理解であった。中村は，小林のマルクス主義文学理解を自らのマルクス主義文学論の結論とした。中村自身は，そうした結論を整合的に導く具体的な議論を組み立てた。さらに，小林は，その中村によって具体的に組み立てられた議論を受容し，「私小説論」において，それを一つの成熟したマルクス主義文学論として表出した。

こうして，「マルクス主義・モダニズム世代」の異端であった小林と，「遅れてきた青年の世代」の一人であった中村との思想的な共振，小林→中村→小林という影響の往復によって，今日においてもなお説得的なマルクス主義文学論，ひいては日本のマルクス主義の思想史・精神史における役割り論としての，小林の「私小説論」がもたらされたのである。(54)

（経済学部教授）

(54) なお，近年における中村光夫のマルクス主義文学論についての論考として，管見の限りでは以下がある。
中山和子「中村光夫とプロレタリア文学」論究の会編『中村光夫研究』七月堂，1995 年。
河底尚吾『中村光夫論』武蔵野書房，1998 年。